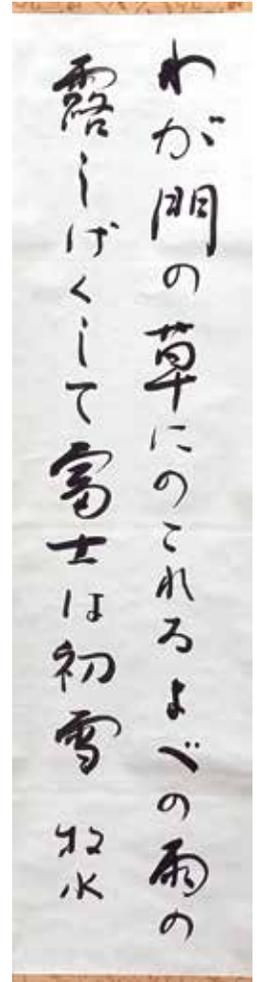


# 沼津市若山牧水記念館

第74号 令和7年3月5日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



わが門の草にのこれるよべの雨の  
露しげくして富士は初雪 牧水

第十五歌集『黒松』（昭和十三年改造社刊）の「富士の初雪」と題する三首のうちの一。他の二首は

富士が嶺にひと夜に降れる初雪の峰白妙に降りうづめたる

この年の富士の初雪したたかに降りてなかなか寂しくぞ見ゆ

最近はまだ見られないが、冬の沼津では、雨が降り底冷えがした次の日は、きれいに雪化粧した富士山を仰ぎ見ることが出来る。

牧水は、「わが門」の言葉が入っている短歌を十二首ほど作っているが、東京の家で詠ったものが一首、「香貫の家」を詠ったものが十首、のこりの一首が松下七反田の借家で詠った掲出の短歌になる。

大正十三年八月に「香貫の家」を家主の都合で返し、新たに借家を借りた牧水。新しい家は、沼津市本字松下七反田九〇八番地ノ一という住所で『創作』大正十三年八月号

玄関、女中部屋を除いてわずかに三間しかなく、それを書齋、編集室、茶の間等にあて、全部で九人の家族が生活をしなければならなかった。なかなか大変だったようで、『創作』の翌月の九月号には次のように記している。

大悟法君も此頃大変であった。何しろこの狭さではどうしても彼一人の部屋と定めて煩雑な事務を執って貰うべき場所が無い。止むなく彼は町中の某知人の二階を借りて其処に机を置き寝起をし飯には三度三度この千本浜の家まで通って来たのである。ところが今度また急にその知人が転居せねばならなくなつて途方に暮れると、これはまた幸にもこの家の隣、女学校の門を中にした向うの家が一軒空いた。東京其処のけの馬鹿高な家賃ではあるが奮発して其処を借り入れ、明日から其処に安置し奉る事となつた。これでお客様を寝かす部屋も出来たという解放。あまり来られても困るが、来た人を廊下にねかす事をほしめない。(移つた翌々日かに来た男女二人のお客をば廊下にねかせた。) 兎にも角にもおちつかぬ此頃ではある。

こんなことが家を新築するという考えの一つになつたのではないかと想像したりしている。

の「創作社便」に「千本浜公園入口の西園寺公筆石碑の所から松原に沿うて右に折れ、約二丁、家政女学校の真ん前」と記している。

館報第六七号で少し紹介したが、この松下七反田の借家は、



玉城徹氏（平成9年10月5日 第44回沼津牧水祭短歌大会）

# 若山牧水の現代的意義

— 玉城徹の牧水論にふれながら —

内藤 明

## 一 はじめに

百年近く前に亡くなった牧水の歌が、今でも愛好されるのはなぜでしょうか。

現在は短歌ブームといわれています。小中学生から高齢者まで、短歌という形で自己の思いを表そうとする人たちがたくさんおられます。若い世代にあつては、口語の短歌が自在に広がって、インターネットやSNSで多くの歌が交わされています。それらと若山牧水の歌の間には距離があるように見えますが、しかし、牧水の歌には様々なものがあり、多様な読み方が可能です。そこから、今日の自分にとっての牧水の意義、歌を作り考えていく糧を得ることができるとしよう。

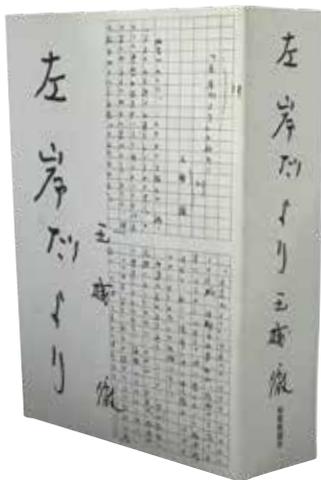
牧水を問い直す観点を、今日は玉城徹の牧水論を媒介にして考えてみたいと思います。玉城氏は、大正十三年（一九二四）に仙台に生まれ、長く東京に住み、多くの歌や評論を書かれました。そして昭和六十三年に、なぜか沼津に転居され、平成二十二年（二〇一〇）に亡くなるまでこの地に住まわれました。こ

の短歌大会や記念館でも話をされ、聞かれた方もあるかと思えます。歌集『香貫』や個人誌を集約した『左岸だより』は、まさしくこの地との繋がりをうかがわせます。しかし、氏自身

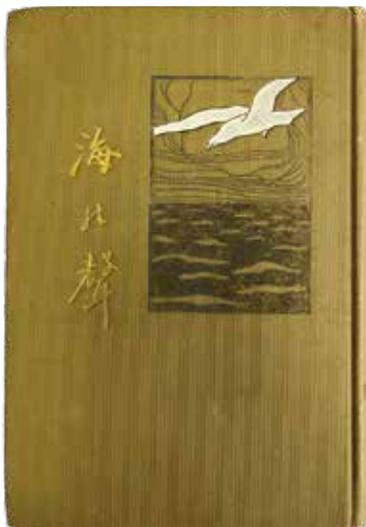
わたしは、しばしば人から、沼津の地を選んで居を移したのは、牧水を敬慕するからかという質問を受ける。どうも、うまく答えられない。「そうだ」と言つては、嘘になるようだが、「そうではない」と言い切るわけにもゆかない。どちらかにきめてしまつては、理屈に陥るだろう。

と韜晦とうかいしています。

玉城氏は、少年時、北原白秋の『多磨』に入つて研鑽を始めた人ですが、広く短歌や世界の思想・文学つうぎょうに通暁し、短歌史について独



『左岸だより』



『海の声』

自の見解を持つておられましたが、難解をもつて知られていました。私はかつて何回か、仲間と玉城氏と沼津の茶房でお目にかかり、記念館で歌会を楽しませてもいただきました。牧水について話をうかがうことはありませんでしたが、今回十三本の牧水論を読むことができました。紙面の関係から、その一部のみを記して、牧水の現代的意義をさぐる一助にしたいと思います。

## 二一 玉城の少年時の体験

### — 歌の始原にある混沌

玉城氏は、「牧水短歌は逸品」<sup>(注1)</sup>で、

空の日に浸みかも響く青々と海鳴るあはれ青き海鳴る 『海の声』 『別離』

という一首をあげて、自らの少年時代の牧水

体験をこう記しています。——<sup>(注2)</sup>「こんな歌が、好きでたまらなかつた」、「どんな明瞭な視覚的イメージをも出現せしめない」、「この歌が表現しているものは、響きと、色とかがやきとの融合にほかならない」、「きわめて本能的、自然発生的に象徴主義的なもの」である。そしてこの歌と、牧水が大学時代下宿をともした北原白秋の

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外の面の草に日の入る夕 『桐の花』

と、通い合うものがあることを何度も指摘しています。

この歌は第一歌集の『海の声』にある歌。

真昼日のひかり青きに燃えさかる炎か哀しむが若き燃ゆ 白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ

と同様に、ややナルシズムを感じさせる浪漫性がありますが（それは与謝野鉄幹や晶子のそれとは位相を異にします）、玉城氏は、聴覚と視覚が自然と融合したこの歌の象徴主義的な表現に魅かれたようです。具体的な内容や感情よりも、身体から湧き出るようなある混沌とした気分がそこにあるとい

えるでしょう。そしてそれは、詩にとつても大切な原点なのです。牧水の基底には宮崎の海があり、最後には沼津の海を求めます。玉城氏は、中年を過ぎて、自らにはない海の混沌を、その深層に希求していたともいえるでしょう。

## 二二 変転する生の時間

### — 文体の葛藤と新しさ

牧水は、明治末期から大正中期にかけて自らの生の危機を体験し、短歌界の変化とも重なって、歌の文体に試行を加えていきます。玉城氏はそれを、

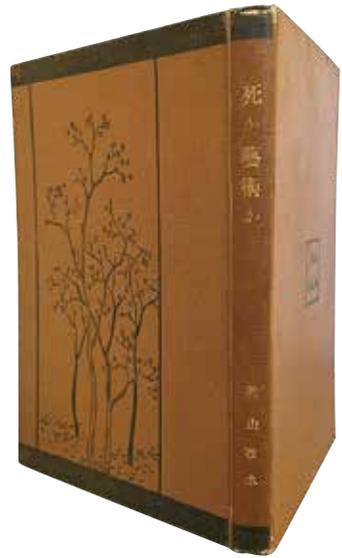
時にたゆたつては、たちまち、岩に高く打ち揚げる波のような恋愛歌は、ようやく人生をつつむ悲哀と倦怠との中に流れこんでゆく。と思うや、次いで、烈しい苦渋に満ちた曲折を経て、歌は、広やかな眺望の中を、静かにゆたかに流れ続けるのである。<sup>(注3)</sup>

と詩的に表現しています。

恋愛の挫折の後の生活の中で、それは

皿、煙管、ソース、お茶などときどきに買ひあつめ来て部屋を作る

『死か芸術か』



『死か芸術か』

うです。しかし、同時期の、たとえば

雨、雨、雨、まこと思ひに労れぬき、  
よくぞ降り来し、あはれ闇を打つ

『死か芸術か』

などには(注)「胸中の思いという内容から必然的に生れ出た」「声調のための声調ではない」声調がそこにはあり、

われも木を伐る、ひろきふもとの雑  
木原春日つめたや、われも木を伐る

『みなかみ』

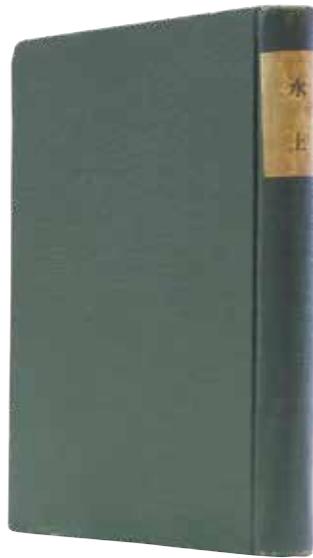
などは(注)「少年の頃から、これが好き」  
で、「ふつうの短歌とは違う」「新しい形があるような心もちがする」と述べています。

納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が  
意志をまぐるなといふが如くに

『みなかみ』

といった自然主義的な都会の生活描写や、故郷での内部の葛藤を表現するような破調の歌を試みるようになっていきます。

玉城氏は、破調歌をあまり認めていないよ



『みなかみ』

玉城氏は、一貫して表現のための表現を批判し、形式からの逸脱を限定的にしか評価しません。しかし、定型を重視するという観点に立つても、後につづく「広やかな眺望の中」に出て行くためには、このような破調や新しさの試行は、その完成度とはかく、必要不可欠だったと思われる。これは、翻つて、短歌の表現が大きな変貌を遂げている現代の短歌やこれからの歌にあつても、重要な課題であるといえるでしょう。

## 二―三 自然と人間、世界と自己

### ― 感情の解放

そして氏は牧水晩期の歌に向き合います。

かはしもの峽間はきまの橋に秋日さしあきらかなれやいま人渡る

『くろ土』

ちちいびいびいとわれの真うへに来て啼ける落葉が枝の鳥よなほ啼け

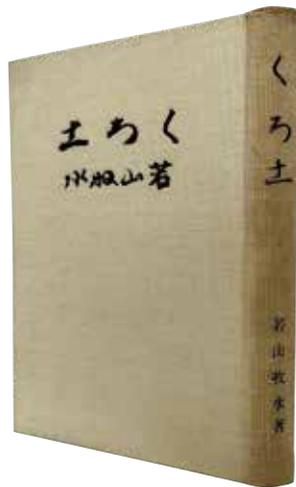
『くろ土』

といった歌を

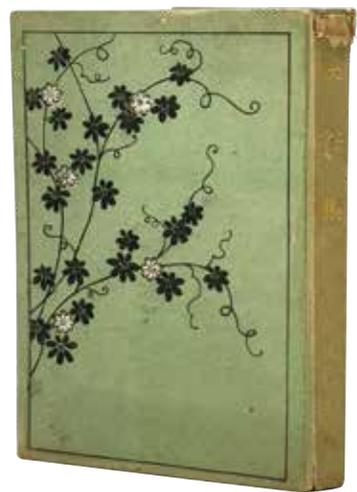
それは、己れを散漫にすることによって、わたしたちが自然と直接会話できるように仕向けるのである。作者自身の個人的に深刻な、ないしは繊細な、その他何でもかまわないが、あれこれの感情を、読者に浸透的に共感させようとするところが、ない点で、これは芸術的に逸品だとしなければならぬ。(注1)

と評価しています。

このような見方は、「実相に観入して自然・自己一元の生を写す。これが短歌上の写生である」といった斎藤茂吉の「短歌に於ける写生の説」との違いをとらえたものでしょう。茂吉も牧水も、天然・自然と人間・自己との



『くろ土』



『溪谷集』

一体を志向しますが、観入する自己と形式を先立たせるような茂吉の写実と違い、牧水の歌は己を散漫にして自然と会話し、「感情の解放」<sup>(注a)</sup>それ自体が歌の内容となるようなものであるという認識がうかがえます。

また、玉城氏は、牧水の、自然にはさまざまな人間の姿が織り込まれているといえます。

飲む湯にも焚火のけむり匂ひたる山家の冬の夕餉<sup>ゆふげ</sup>なりけり 『溪谷集』  
菜をあらふと村のをみな子ごとごとく寄り来てあらふ此処の温泉に 『くろ土』  
洗ひ終へてやがて菜を負ひかたつむり歩むがごとく負ひて帰りぬ 『くろ土』  
二、三首目について、氏は、平凡な情景に過ぎないが、「言葉は、見えて来たものに添って、自然に柔軟に流れてゆくのである」<sup>(注c)</sup>とその世界に心を寄せています。

玉城氏は、

抒情の本質は自己離脱にあつて、自己収斂<sup>しよく</sup>にはない。自己を忘却して、自然の中へ無限に拡散してゆきながら、一つ一つの対象の上にしぼしどどまってゆく、そのような波動こそ、詩歌の根本的な運動だというのが、わたしの考えである<sup>(注d)</sup>

とも述べています。牧水の歌の読みを通して、玉城氏は、短歌における抒情の本質への自らの思いを語っているともいえるでしょう。

### 三 おわりに

若山牧水の歌をどう読むかは、いろいろな見方があり得ます。牧水自身変化しているし、

何をもってその特徴とし、評価するかは人さまざまです。玉城氏の論も（ここではその一部しか触れませんでした）もちろんその一つで、そこには、和歌・短歌の形を変わらざるものとして、それは散文（小説・随筆・論文）などとも、またその後の二十世紀の短歌や文学・芸術とも異なったものとする、玉城氏自身の立場がうかがえます。そういう意味では今日ではなかなか理解されにくいものですが、短歌の歴史の中にその牧水論を置いてみると、玉城氏が短歌や文学や人間に求めていたものを再認することもできるでしょう。

牧水没後、大戦争があり、社会の変化があり、言葉の変容がありました。短歌の対象とする世界は、自然や人間でなく、社会・物質・機械・情報に移っていきました。しかし、牧



平成10年4月21日に来館された玉城徹氏

水の歌はすでにその当時の現代とも一線を引いて存在していたのかも知れません。

しかし、文明のさらなる変化が人間に危機をもたらしつつある現在、牧水の志向は新たな意味を持つて来るように思われます。自然の一部としての人間の存在、自己という個に<sup>しゅうれん</sup>収斂しない私と私たち、自然界にあつて多くの普通の人々が平等に生き、命を共有する世界。そういったものへの希求を牧水は語っているといえるのではないのでしょうか。日向の山と海を幼年体験として身体に刻み、旅することによって日本と日本人を感じ、沼津の海と山を自ら選んだ牧水は、それを歌でうたったといえるように思われます。

こういった世界は、百年前に、すでに憧憬に近いものであったのかもしれない、短歌は、そのような人間と自然の原郷、故郷の幻想を、遠く追い求めていく形式なのかもしれません。そして、自己収斂に行かない自己のあり方は、表現主義に陥らない詩のあり方とともに、玉城氏が日本の詩の中に求めていたものともいえるでしょう。そこに漂う、哀しみ、寂しき、懐かしさを味わい、牧水の中に入りこんでいく玉城氏を追いながら、いつの間にか源の牧水その人から、大きな問いを与えられることにもなりそうです。

注 玉城徹の牧水論

- a 「牧水短歌の位相」  
『現代短歌』18 1966 (昭和41) 年11月号  
『近代短歌の様式』1974 (昭和49) 年所収
- b 「牧水短歌の意義と特質―若い読者のために」  
『虹は彼方に』1967 (昭和42) 年所収  
『牧水晩期作品について』
- c 「創作」1978 (昭和53) 年9月号  
『若山牧水全集』第10巻 1983 (平成5) 年
- d 「牧水短歌は逸品」  
『創作』1983 (昭和58) 年1月号  
『牧水短歌の根本思想』
- e 「創作」1983 (昭和58) 年12月号  
『自然について』
- f 「短歌」1985 (昭和60) 年8月号  
『牧水の位置―概説書き直しのために―』
- g 「創作」1986 (昭和61) 年1月号  
『牧水という歌人』
- h 「創作」1993 (平成5) 年12月号  
『牧水短歌の人間像』
- i 「沼津市若山牧水記念館館報」第21号  
1998 (平成10) 年12月
- j 「牧水の文学的位置」  
『若山牧水随筆集』講談社文芸文庫  
2000 (平成12) 年1月
- k 「二十世紀の短歌を考える」  
『左岸だより』第7回 2004 (平成16) 年11月  
『牧水の一時期』
- l 「左岸だより」第56回 2008 (平成20) 年10月  
『歌集「黒松」の短歌』
- m 「左岸だより」第59回 2009 (平成21) 年1月

『幾山河』第22号 2009 (平成21) 年5月  
b, e, f, g, hは『近代短歌とその源流』所収

「筆者プロフィール」 ないとう あきら



昭和二十九年、東京都大田区生れ。早稲田大学第一文学部卒業。同大学院博士後期課程退学。早稲田大学名誉教授。在学中に歌誌

「まひる野」に参加して、作歌活動を開始。同五十七年武川忠一の歌誌「音」に参加、現在発行人。

平成一六年、歌集『斧と勾玉』で第五四回芸術選奨文部科学大臣新人賞と第九回寺山修司短歌賞、平成二六年、歌集『虚空の橋』収録の作品「ブリッジ」で第五〇回短歌研究賞、平成二七年歌集『虚空の橋』で第二回佐藤佐太郎短歌賞、第二〇回若山牧水賞、令和元年、歌集『薄明の窓』で第五三回「逍空賞」をそれぞれ受賞。その他の歌集に『壺中の空』『海界の雲』『夾竹桃と葱坊主』『三年有半』、著書に『うたの生成・歌のゆくえ 日本文学の基層を探る』『万葉集の古代と近代』『抒情の構造』等がある。令和六年一〇月六日に開催した第七一回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。

第三十五回  
中学生短歌コンクール



第三五回中学生短歌コンクールに、例年どおり沼津市内全一九校から一七八四首の参加があった。学校行事、部活動、テストを詠ったものや、夏祭りの思い出を詠ったものが大半を占めた。現在の中学生が、意外に狭い範囲に多くの意識を向けて生活している印象を持った。また特筆すべきは、出詠作品の中に、インターネットから流用された作品が数首含まれていた事である。生成AIの普及や、生徒全員がPC端末を持つようになった事などが主因と思われる。国語教育におけるモラル教育の低下を見る思いがした。選考は沼津牧水会理事の河本尚子、湯山昌樹、永久保英敏及び沼津牧水会会員の勝俣文子が行った。

以下、特選作品を紹介する。

(永久保英敏)

水曜日折り返す日はどこもなく青色な気が  
する午後の教室 中塚結理(門池中)

なんとなく物憂いような、少し疲れたような週中の気分を、青色のイメージで表現したところに、中学生らしい繊細さを感じさせる作品である。

古写真に見つけた先祖の笑みの中父の顔あり  
り我の顔あり 大橋叶和(暁秀中)

古いご先祖の写真の中に、お父さんや、自分に似た顔を見つけたことよって、自分のルーツなどに思いをはせた作者の、心情が伝わってくる。

初めてのリング内での手応えがグロブご  
しに体に染みる 武田蓮央(第五中)

ボクシングをしている作者。スポーツとはいえ、人を殴るという経験の、生々しい手応えや、体に染みる感覚が伝わってきて、臨場感のある作品。

ダンスって最高なんだ私の体ソーダのよう  
にはじけるみたい 鬼海琉愛奈(金岡中)

大好きなダンスを踊っている楽しさで、こみ上げてくる嬉しい感情を、ソーダがはじけると言った作者に、うらやましいほどの若さを感じる。

思い切り音を震わせてみたくなる体を張った  
監物の指揮 花田晋太郎(金岡中)

合唱、または合奏の場面。友人である「監物」君の、体を張った指揮によつて、作者や、その仲間たちの気持ちが、ひとつになる様子が想像される。

木曜日テスト終わりの帰り道今なら空も飛  
べる気がする 市野紗菜(大岡中)

中学生にとってテストは、大きな試練である。その試練から解放された気持ちを「空も飛べる気がする」と言ったところによく表現されている。

船走る透き通る海かき分けて二匹のトビウ  
才五秒滑空 近藤空海(今沢中)

透き通る海で船に乗る体験中にトビウオを見るという心が浮き立つ経験をした作者。「二匹」「五秒」という具体的な表現で、場面が良く想像できる。

太陽がとても輝く6月で日差しが人を突き  
刺している 石井涼夏(大岡中)

初夏の日差しの明るさが人を突き刺している、と感じた作者の感受性の豊かさに、中学生らしい繊細さと、素直さが感じられる作品である。

日記帳あの日この日の思い出をこぼさぬよ  
うに書き留めていく 大橋由愛(金岡中)

日記帳にこぼさぬように書き留めるという表現によつて、日々の中学生生活を丁寧に、そして大事に過ごしている作者の姿が想像させられる。

水槽で大きいマンタはばたくよ窮屈そうだ  
作った海は 宮島叶依(第五中)

作った海である水槽のマンタは、窮屈そうに見えるが、その中でも羽ばたいている。中学生である作者の心情をあらわしているようにも読める作品。

## 第二十九回若山牧水賞に

### 大辻隆弘氏の『つるばみ橡と石垣』 高山邦男氏の『Mother』



(宮崎日日新聞社 提供)

和六十一年に短歌結社「未来短歌会」に入会、岡井隆に師事。平成十年に現代歌人集會賞、同十五年に寺山修司短歌賞、同二十九年に齋藤茂吉短歌文学賞、令和五年に小野市詩歌文学賞をそれぞれ受賞。歌誌「未来」編集発行人。受賞作は、コロナ禍や師である岡井隆の死、定年退職などの人生が大きく変化した時期に作った四百十四首をまとめたもの。

大辻氏について栗木氏は、「観察のまなざしが繊細で言葉の選択も周到。日常の何げない風景を実感込めて見事に歌っている」と語った。

歌集『橡と石垣』から作品を紹介する。

うつくしき冬野が右の頬を刷き列車は木津の駅に近づく  
北向きの廊下に椅子は積まれをり脚やはらかく組みあはされて  
青鷲のつばさの色が雲に融けしづかに冬は至らむとする  
みづからが作りし劇に涙して舞台の袖のくらがりにをり  
暫く、無視してをれば短歌から立ち去るだらうこの若者も

高山邦男氏は昭和三十四年東京都生まれ。早稲田大学第一文学部在学中に短歌結社「心の花」に入会。就職で十年ほど短歌から離れたが四〇代で再開。平成二十九年に日本歌人クラブ新人賞、ながらみ書房出版賞を受賞。「心の花」編集委員。

受賞作は、個人タクシー運転手として働きながら認知症の母を介護し、母が亡くなるまでの約六年間に詠んだ四百六首が収録されている。

高山氏について高野氏は「高山氏は人生を深いところから眺め、つらい状況もユーモアを交えて分かりやすく表現した歌がいい」とたたえた。また、伊藤氏は「作風が対照的な二人で違いがあるからこそ同時受賞の面白みが出る」と話した。

歌集『Mother』から作品を紹介する。

笑ひ顔だけは昔の母なりてケイトウの赤い花をよるこぶ  
笑つてるやうな寝顔で眠りをる母は無言でわたしを救ふ  
人生の夕日とはこんな感じかなわれはまた母に教はり生きる  
スプーンで口元に運ぶカレーライス二人羽織めく母の食事は  
母に母その母にまた母がある大河のやうな願ひの中に

第二十九回若山牧水賞が大辻隆弘氏の第十歌集『橡と石垣』と高山邦男氏の第二歌集『Mother』に決まった。二名同時の受賞は、五年ぶりで五回目。選考委員は、佐佐木幸綱、高野公彦、栗木京子、伊藤一彦の四氏。

授賞式は、令和七年一月三十日(木)ザ・メイビア宮崎で行われた。授賞式の後、受賞者と伊藤一彦氏のコーディネートによるトークイベントが行われた。

翌三十一日(金)にカルチャープラザのベオカで大辻隆弘氏の「牧水の叙景」と高山邦男氏の「牧水のへわれ」と題した受賞記念講演会が行われた。

大辻隆弘氏は昭和三十五年三重県生れ。昭